

花筐

觀阿弥作

前

男 勅使

シテ 照日の前

後

王（謡なし） 繼体天皇

ワキ 供奉官人

ツレワキ 随行者

シテ 前に同じ

ツレ 侍女

季は

秋九月

後は大和

地は

前は越前

後は大和

「是は越前の国味真野と申す所に御坐候。大跡部の皇子に仕へ申す者にて候。さても都より御使あつて。武烈天皇の御代を。あぢまの、皇子に御ゆづりあり。御迎の人々まかり下り御供申し。今朝とく御上洛にて候。さる間此程御寵愛あつて召しつかはれて候。照日の前と申す御方。此程御暇にて御里に御座候ふが。彼御方へ俄の御上洛につき。御玉章と朝毎に御手に馴れし御花筐をまるらせられ候ふを。某に持ちて参れとの御事にて候ふ程に。只今照日の御里へと急ぎ候。あらうれしや是へ御出で候ふよ。是にて申し候ふべし。いかに申し候。「何事にて候ふぞ。

「我君は都より御迎くだり。御位に即かせ給ひ。今朝とく御上りにて候。又是なる御文と御花筐とを。たしかにまるらせよとの御事にて候。これ／＼御覧候へ。

シテ

「さては我君御位に即かせ給ひ。都への御上り返す
ぐも御めでたうこそ候へとよさりながら。此年
月の御名残。いつの世にかは忘るべき。あら御名
残をしや。されども思召し忘れずして。御玉章を
残し置かせ給ふ事のありがたさよ。急ぎ見るら
せ候はん。

シテ
「我応神天皇の孫苗を継ぎながら。帝位を履む身に
あらざれども。天照大神の神孫なれば。毎日に伊
勢を挙し奉りし。其神感の至りにや。君臣のえら
びに出だされて。いざなはれゆく雲の上。めぐり
あふべき月影を。秋の頼みに残すなり。頼めたゞ
袖ふれ馴れし月影の。しばし雲井に隔てありとも
と。

下歌地

「書き置き給ふ水茎の。跡に残るぞ悲しき。

上歌地

「君と住む。程だにありし山里に。く。ひとり
残りて有明の。つれなき春も杉間ふく。松の嵐も

いつしかに。花の跡とてなつかしき。御花筐玉章

を。いだきて里に帰りけり。く。_(中入)

ワキ、ツレ次第「君の恵みも高照す。く。紅葉の行幸早めん。

ワキサシ「かたじけなくも此君は。応神天皇五代の御末。大跡辺の皇子と申しが。当年御即位をさまりて。継体天皇と申すなり。

ツレワキ「されば治まる御代の御影。日の本の名もあひにあふ。

ワキ「大和の国や玉穂の都に。

ツレワキ「いま宮造り。

ワキ「あらたなり。

ワキ、ツレ歌「万代の。恵みも久し富草の。く。種も榮ゆく秋の空。露も時雨も時めきて。四方に色添ふ初紅葉。松も千年の緑にて。常磐の秋に廻りあふ。行幸の車早めん。く。

後ジテ「いかにあれなる旅人。都への道教へて給べ。

詞

「何物狂とや。物狂も思ふ心のあればこそ問へ。など情なく教へ給はぬぞや。

ツレ女
「よしなふ人は教へずとも。都への道しるべこそ候へ。あれ御覽候へ雁金の渡り候。

シテ
「何雁金の渡るとや。げに今思ひ出だしたり。秋にはいつも雁金の。南へ渡る天つ空。

ツレ
「空ごとあらじ君が住む。都とやらんも其方なれば。

シテ
「声をしるべの便の友と。

ツレ
「我も田面の雁金こそ。つれて越路のしるべなれ。

シテ
「其上名におふ蘇武が旅雁。

二人一聲
「玉章を。つけし南の都路に。

地
「我をも共に連れて行け。

シテ
「宿かりがねの旅衣。

地
「飛びたつばかりの心かな。

シテサシ
「君が住む越の白山知らねども。行きてや見まし足

引の。

二人 「大和はいづく白雲の。高間の山のよそにのみ。見てや止みなん及びなき。雲井はいづく御影山。日の本なれや大和なる。玉穂の都に急ぐなり。

下歌地 「こゝは近江の海なれや。みづからよしなくも。及ばぬ恋に浮舟の。

上歌 「こがれゆく。旅を忍ぶの摺衣。／＼。涙も色か

黒髪の。あかざりし別路の。跡に心の流れ来て。

鹿の起臥堪へかねて。猶通ひゆく秋草の。野暮れ山暮れ露分けて。玉穂の宮に着きにけり。／＼。

ワキ 「時しも頃は長月や。まだき時雨の色うすき。紅葉の行幸の道の辺に。非形をいましめ面々に。行幸の御先を清めけり。

シテツレ 「さなきだに都に馴れぬ鄙人の。女と云ひ狂人と云ひ。さこそ心は楓の葉の。風も乱るゝ露霜の。行幸の先に進みけり。

ワキ

「不思議やな其さま人にかはりたる。狂女と見えて
見苦しやとて。官人立ちより拝ひけり。

詞 「そこのき候へ。

ツレ 「あら悲しや君の御花籠を打ち落されて候ふは如何
に。

シテ 「何と君の御花籠を打ち落されたるとや。あら忌は
しの事や候。

ワキ 「いかに狂女。持ちたる花籠を君の御花籠とて渴仰

するは。そもそも君とは誰が事を申すぞ。

シテ 「事あたらしき問事かな。此君ならで日の本に。又
異君のましますべきか。

ツレ 「我らは女の狂人なれば。知らじと思召さるゝか。

かたじけなくも此君は。応神天皇五代の御孫。過
ぎし頃まで北国の。あぢまのと申す山里に。

シテ 「大跡辺の皇子と申しきが。

ツレ 「今は此国玉穂の都に。

シテ「継体の君と申すとかや。

ツレ「さればかほどにめでたき君の。

シテ「御花筐を恐れもなさで。

ツレ「打ち落し給ふ人々こそ。

シテ「我よりも猶物狂よ。

地「恐しや。く。世は末世に及ぶといへど。日月は地に落ちず。まだ散りもせぬ花筐を。荒けなや荒金の。土に落し給はゞ。天の咎めも忽に。罰あた

り給ひて。わが如くなる狂氣して。共の物狂と。

言はれさせ給ふな。人に言はれさせ給ふな。

シテ「かやうに申せば。

地「かやうに申せば。只現なき花筐の。か毎ゝやおぼすらん。此君いまだ其頃は。皇子の御身なれど。

朝ごとの御勤めに。花を手向け礼拝し。南無や天照皇太神宮。天長地久と。称へさせ給ひつゝ。御手を合させ給し。御面影は身に添て。忘れ形見ま

でも。おなつかしや恋しや。

シテ
「陸奥の。浅香の沼の花がつみ。

地
「且見し人を恋草の。忍ぶもじずり誰故ぞ。乱心は君のため。こゝに来てだに隔てある。月の都は名のみして。袖にも移されず。又手にも取られず。唯徒に水の月を。望む猿の如くにて。叫び伏して泣き居たり。／＼。

ワキ詞
「如何に狂女。宣旨にて有るぞ御車近う参りて。い

かにも面白う狂うて舞ひ遊び候へ。覗覧あるべきとの御事にてあるぞ。急いで狂ひ候へ。

シテ
「うれしやさては及びなき。御影を拝みや申すべき。いざや狂はん諸共に。

シテツレ一聲
「行幸に狂ふ囃子こそ。

地
「御先を払ふ袂なれ。

シテサシ
「かたじけなき御譬へなれども。いかなれば漢王は。

地
「李夫人の御別れを歎き給ひ。朝政神さびて。夜の

おとゞも徒に。唯思ひの涙御衣の袂をぬらす。

シテ
「また李夫人は紅色の。

地
「花のよそほひ衰へて。しをるゝ露の床の上。塵の鏡の影を恥ぢて。終に帝に見え給はずして去り給ふ。

クセ
「帝ふかく歎かせ給ひつつ。其御かたちを。甘泉殿の壁にうつし。我も画図に立ち添ひて。明暮歎き給ひけり。されどもなかく。御思ひは増されども。物いひかはす事なきを。深く歎き給へば。りせうと申す太子の。いとけなくましますが。父帝に奏し給ふやう。

シテ
「李夫人は本はこれ。

地
「上界の嬖妾。くわするこくの仙女なり。一旦人間に。生るゝとは申せども。終に本の仙宮に帰りぬ。

泰山府君に申さく。李夫人の面影を。しばらくこゝに招くべしとて。九華帳の内にして。反魂香を焼

き給ふ。夜ふけ人しづまり。風すさましく月秋なるに。それかと思ふ面影の。有るか無きかにかれろへば。猶いやましの思草。葉末に結ぶ白露の。手にも溜らでほどもなく。唯いたづらに消えねれば。縹渺悠揚としては又。尋ねべき方なし。

シテ「悲しさのあまりに。

地「李夫人の住みなれし。甘泉殿を立ち去らず。空しき床を打ち払ひ。ふるき衾ふるき枕。ひとり袂をかたしく。

ワキ詞

「宣旨にあるぞ。其花筐を参らせあげ候へ。

シテ「余りのこと胸ふさがり。心空なる花筐を。恥かしながらまるらする。

ワキ「帝は之を収覽あつて。疑ひもなき田舎にて。御手に馴れし御花筐。同じく留め置き給ひし。御玉章の恨みを忘れ。狂氣を止めよ本の如く。召し使はんとの宣旨なり。

シテ「げにありがたや御めぐみ。直なる御代に帰るしる

しも。思へば保ちし筐の徳。

ワキ「かれこれ共に時に逢ふ。

シテ「花の筐の名を留めて。

ワキ「恋しき人の手馴れし物を。

シテ「かたみと名づけそめし事。

ワキ「此時よりぞ。

シテ「はじまりける。

地「ありがたやかくばかり。情の末を白露の。めぐみ
に洩れぬ花筐の。御かごとましまさぬ。君の御こゝ
ろぞありがたき。

地「御遊も既に時過ぎて。く。今は還幸なし奉らん
と。供奉の人々御車やりつゝけ。もみぢ葉散り飛
ぶ御先を払ひ。払ふや袂も山風に。さそはれゆく
や玉穂の都。さそはれゆくや玉穂の都に。尽きせ
ぬ契りぞ有難き。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション
『謡曲評釈 第一輯』 大和田建樹 著